

FASTEST LIFE

written by HADEYA

第一部

1

孤独な夜に咽び泣く。口から噴出されるのは嗚咽と吐瀉物——血反吐。
今、俺はここにいる。確かに、いるのだと思う。しかし……

社会的弱者の逆襲に焦がれ。

自由権利だ——暴れて死のうぜ！
何も怖くない、どいつもこいつもブッ飛バース！

……夜。儀式は高架下で行われている。
タバコの吸い殻をローファーが踏んだ。女子高生の神崎葵は見張り役。彼女の傍ら……少し離れた暗がりで〈儀式〉は行われている。

儀式——殴る蹴る、痛め付ける。徹底的に。

竹見勝は〈そいつ〉が許せなかった。虐められている事を担任にチクったからだ。
鳴れた手付きで竹見は伸縮警棒を抜いた。慌てて伊野清——イノキが止めに入る。
「タケ、これ以上、やったらヤベえって！ これくらいにしておこうぜ！」
息を切らせながら竹見は告げた。
「最後の一発」
言うなり警棒が翻った。警棒は鈍い音と共にフルスイングで〈そいつ〉の脳天を打ち抜いた。

そいつの名は菊池空。坊主頭の典型的な、虐めて君。

2

月明りの下、ソラは足を引き摺りながら歩いている。歩きながら考える——どうするか。竹見らは百万円を自分に要求している。

*

「慰謝料、払います」

「幾ら？」

「……一万円」

嘗めた言動に込み上げる怒り。竹見はそいつの胸倉を掴んだ。

「百万だろうが！」

「む、無理です！ 払えません！」

折り畳みナイフの刃先を見せ付け、

「お前、一辺、刺されてみるか？」

「い、いえ———値下げして下さい！」

「じゃあ、99万」

「……払います」

「払う、つつとカツアゲになるからプレゼントだよな？」

「はい、差し上げます」

「感想は？」

「どうもありがとう……」

*

電車に飛び込む。それで一巻の終わり、さ。待て待て、他の方法が良い。リストカットはどうだろう？ シルバーシートに着席しながらソラは考えている。

「確実に死ぬる、と聞いたし……それがいい、それにしよう。薬局でカッターを買って、手首を切ろう。バツサリと」ソラは顔を上げた。目の前の座席では幸せそうなカップルが寄り添い、幸せそうに寝ている。

羨ましかった。何の苦しみもない人生を送る彼ら。何故、自分だけが苦しむのか。何故、自分だけが虐められるのか。どれだけ考えても答えは見付からない。永遠に見付からないのだと思う。

寝ているカップルを見て、ソラは涎が出るほど羨ましいと感じていた。

3

「いらっしゃいませ！」

桜木舞は元気良く挨拶した。元気になる筈だ。今、接客した客が超イケメン男性だったからだ。

いつか彼氏が出来ると思う。信じ、働く。働き、信じる。バイトに明け暮れる日々———素敵な人が現れたら……その場で番号交換をしよう。意は固い。

物音。身体が条件反射して挨拶が口から吐いて出る。

「いらっしゃいませ！」

レジに無造作に置かれた、T字の剃刀。客は俯き、覇気のない坊主頭の男子高生だ。少し陰のある人——私のタイプ。

意中の彼が顔を上げた。

イナズマ、そして一気にFALLING LOVE。

この時、舞は知らなかった。今、目の前にいる男性こそが〈未来の彼氏〉である事を。

*

ソラが押し倒す。夜の川原で。右手には携帯電話が握られている。

見つめ合い、キスできる至近距離でソラは告白した。

「桜木さん……彼氏、いるんですか？」

舞の左手にも携帯電話が握られている。舞はソラを見詰めながら電話で話している。

「いない、です」

「俺と付き合ってください」

携帯電話で会話しながらキスを交わす。そんな気分で——

「答えは勿論、イ——」

プツリと通話が途絶えた。

川原でなく、私は今、ドラッグストアでバイト中。意中のターゲットを前に。

舞が一瞬、鋭い眼光を見せる。獲物を仕留めるハンターの眼差し、野獣の輝き。

……運命とは奇妙なモノだ。彼女が恋に落ちたのに対し、彼は今、死のうとしている。スレ違う二人が出会ったのは偶然ではない筈だ。

男と女が出会って感じる事はたった一つ——防衛本能、だ。

しかし二人はそれ以上の〈何か〉を感じている。確かに未知のエモーションを感じている。

二人は突然、炎の如く燃え上がり、ラリー・クラークの〈KIDS〉のように派手に一発をキメるのだ。

4

「どこに行ってたの、ソラちゃん！」

帰宅するなり玄関で母が怒鳴った。

「……予備校」

「嘘、言いなさい。予備校に電話して聞いたら、あんた、ほとんど欠席じゃない。どういう事かパピーの前で説明しなさい！」

「ゲームセンターで遊ばせる為に高い授業料を払っているんじゃない、勉強させる為だ！」

父はテーブルを叩いた。厳しい口調で説教を垂れる。

「大体、お前は勉強だって出来る方じゃないだろう？なのに遊んでばかりいて」

「……」

「飯を食って、さっさと勉強しろ」

「はい」

空は立ち上がった。解放感が沸く。もう小言を耳にする事もない。あばよ———心の中で呟いた。クタばれ———面と向かって言ってやりたかった。

心の中でブツクサ言いながら居間を後にする。母から受け取った夜食と共に。階段を登ろうとして転んだ。牛乳瓶が割れた。割れた瓶の破片の上に転倒した。

こうして空は呆気なく死んだ。

5

目を開けると、そこは漆黒の闇。目の前にセーラー服を着た厳つい男性が立っている。男の頭には赤い角が生えている。強面で彼はじっと自分を睨んでいる。

不思議そうにソラは尋ねた。

「ここ、どこですか？」

男———悪魔が答えた。

「地獄！」

「じ、地獄?!」

「お前は永遠にここから出られない！」

「な、何で……僕は悪い事なんて———」

悪魔は首根っこを掴んだ。怪力で軽々とソラを持ち上げる。

「虐められる奴はどこに行っても虐められるんだよ、阿呆が」

悪魔は空を背負い投げで投げ飛ばした。背中を壁のようなモノに打ち付けられ、強い衝撃がソラの頭頂部を突き抜けた。同時に———

6

———強い衝撃で目が覚めた。そこは高架下。目の前には竹見とイノキが立っている。見張り役の葵も視界に入る。

……思い出した。〈儀式〉の最中だ。警棒でフルスイングされ、意識を失っていたのだ。

イノキが背中を蹴った。口を尖らせながら。

「ようやく起きたぜ、気絶ぶりやがってよ！」

状況を把握した。気絶して夢を見た。長い長い夢を。思い付く限り最低の悪夢を。

「お前、何でここにいるか覚えてっか？」

ドスの効いた口調で竹見は尋ねた。

「僕は……」

覚えている。何もかも。鮮明に。薬局で剃刀を買った。店員がメチャメチャ可愛かった。両親に怒鳴られ、階段で転んだ。そして———地獄の一丁目へ。

「ここが地獄だよ、ソラ」

言いながら竹見は折り畳みナイフを抜いた。刃が白く煌めく。

「お前、一辺、刺されてみるか？」

心臓が激しくビートを刻む。血液が逆流し、アドレナリンが全身を駆け巡る。

イナズマ———スパークして僕……俺は炎上する。

俺の目を見ろ。

竹見は垣間見た———真にヤバいく何かを。ゾクツとして背筋を電流が走った。空気がバイブレーションとなってイナズマを伝える。ソラの毛髪が逆立つ。その表情は本気と書いて、マジと読む。

虐められる奴はどこに行っても虐められる。逃げ道はない。どこに行っても地獄。どこに行っても、そこは暗黒

———

「うわあっ！」

高架下で空が竹見を殴る時、暗黒世界で空が悪魔に飛び掛かる時———そのタイミングが綺麗にシンクロする。

馬乗りになってソラは首を絞めた。竹見は……悪魔は金魚のように口をパクパクさせている。

「止めろよ！ 死んじまうだろう！」

見張り役の葵が止めに入った。イノキは怯えながらオロオロしている。

空が右拳を掲げた。もはや虫の息の竹見を見降ろし———

「竹見……俺の目を見ろ……俺の目を見ろ！」

竹見は見た。血走った眼差し———真空のイナズマを。その目に燃えるのは地獄の業火。苦悩を知り尽くした者だけが辿り着く悟りの境地。

空は右拳で渾身の一撃を竹見の顔面にブチ込んだ。そして悪魔の首を絞める、万力の力で。

ゲス野郎共をブチノメしてやる。

竹見は口から泡を噴いている。悪魔は顔を紅潮させながら口をパクパクさせている。

その首がカクツと折れた。それでもなお首を絞め続ける。万力の力で絞め続ける。全身をワナワナ震わせながらガクガク首を揺さぶる。

次の瞬間、光を見た。突如として発生するインスピレーション。青白く迸る鮮烈な電流。

ソラは悟った。もはや運命を変えるしか道が残されていない事を。そして運命とは自分の力で切り開くモノだと言う事を。それは生存本能。本能がソラの運命を大きく変えたのだ。

走った。光の中を。全速力で。
カミカゼが吹く。一人きりの特攻隊が行く——乱気流特攻隊が。

ソラのカウンターアタックが……社会的弱者の逆襲が始まった。

第二部

7

駆ける。疾風となって。光を抜け、ドラッグストアへ。走った。女神……未来のガールフレンド、俺の女の元へ。

燃え上がる情念。ダーク・パッションがソラを突き動かす。

「いらっしゃいませ！」

レジにドンッと手を付き、空はきっぱり告げた。突然、余りに突然。

「電話番号、教えて下さい！」

「は、はい??？」

「余りにも可愛かったもので、声を掛けられずにいられなかったんです。良ければ、今度、デートをしませんか？」

*

「どこに行ってたの、ソラちゃん！」

帰宅するなり玄関で母が怒鳴った。ローファーを脱ぎながら空が答える。

「ダチといた」

「予備校は？」

「行ってない」

「行ってないじゃないでしょう！ どう言う事かパピーに説明しなさい！」

立ち止まり、ソラは母を見た。きっぱり告げる。自分の想いをきっぱり。

「するよ。しても無駄だろうけど」

言いながら居間に入った。父はテレビを見ている。ソラを見るなり、父は怒鳴った。

「どこで遊んだんだ！」

怯まず、空が父の前に立つ。テレビを消し、ソラは告げた。

「予備校に行きたくない」

「何を言っている？」

「行きたくないものは行きたくないんだ」

父が立ち上がった。険しい面持ちで怒鳴り散らす。

「行かないでどうする！ 馬鹿者！ フラフラしているつもりか！」

「僕の自由だ！ 予備校に行こうが行くまいがフラフラしてようが野垂れ死のうが俺の自由だ！」

「自由と墮落を取り違えるな！」

「取り違えてない！ 予備校に通うのが自由だって言うんなら、俺はどこまでも墮落したい！」

「じゃあ、出て行け！ 落伍者をうちに置いておく訳にはいかん！ 今すぐ荷物を纏めろ！」

空は母を見た。どこまでも醒めた眼差しで。

「ね？ 無駄でしょう？」

「ソラちゃん、待ちなさい！」

母の前を横切り、ソラは家を出た。自転車で夜道を突っ走る。その走りに迷いはない。今のソラに怖いモノはない。失うモノなど何もないからだ。

8

夜、川原。使い捨てライターで参考書を燃やす。燃え上がる炎を眺めながら鼻歌を歌う。

ソラは携帯電話を出した。ディスプレイには〈未来のカノジョ〉と記載されている。

*

桜木舞は数学の宿題をしている。デスクの上の携帯電話が着信した。ディスプレイを見る。相手はソラだった。

待ってました——舞が通話ボタンをフリックする。

「もしもし？」

「菊池ですけど——」

「さっきはビックリしましたよ」

「——今、大丈夫ですか？」

「うん。宿題やってた」

「宿題なんて出るの？」

「出るんですよ、うちの高校は」

「どこ高校？」

「聖真女子です」

〈聖真女子〉は都内一のエリート校。平均偏差値は七十三。これは一部の教師しか知らない事だが、舞の入試結果はトップの成績だった。

「あったま良い！」

「そんな事ないですよ」

「うちに比べたら」

「高校どこですか？」

「平成六校」

〈平成六校〉は馬鹿高校。嘆願推薦で誰でも入れる。取り柄と言えばイケメン男性が多い事。

「え、平成六校？ イケメンしかいない学校ですよ？」

「そんな事ないよ」

「有名じゃないですか。雑誌とか出まくりだし。うちの生徒はそういう雑誌とは無縁ですけど」

気分が高揚する。どんな気分か。例えるなら都会のナイトクラブでノリノリで会話する気分——

——携帯電話を手に。二人はでダンスフロアでステップを踏みながら会話に夢中。

「ところで、ソラさん、兄弟は？」

「いない！ 一人っ子」

「いいなあ！」

「俺は兄弟が欲しかったよ！」

「いらないですよ！ テレビのリモコンは取り合いだし、クリスマス・プレゼントは二人で一つだし！」

「そうなんだ！」

「空さん——」

会話がヒートアップする。エンジン全開。ツインターボの爆発力でグングン加速する。

今、二人はジェットコースターに乗っている。最前列でレッツ・パーティー！

「——あれ知ってる！」

「何！」

「邪悪なる妖怪チョコ！」

「知ってるよ！ オマケの人形が光るお菓子だろう！」

「そうそう、夜になると光って怖いんですよ、あれ！」

「じゃあ、あれ知ってる！」

「何！」

ジェットコースターが急降下した。舞がソラに寄り添う。未発育のバストが右腕に触れる。

「男の中の男チョコ！」

「そんなチョコないですよ！」

「あったって！ オマケの人形、俺、集めてたもん！」

*

ドアが開き、妹の弥生が現れた。

「お姉ちゃん！電話がうるさくて勉強できない！」

舞は右手を突き出し、中指を立てた。

「うるせえのは手前だ！ブスのチビの低能！」

「お母さんに言う！」

「言ったら、お前の秘密を暴露する！嫌ならとっとと出て行きな、オカッパ頭！」

弥生は思い切りドアを閉めた。

*

燃え盛る大地で舞が携帯電話を手にソラを押し倒す。今にもキスできる近距離で舞が言う。

「私……好きな人がいるんだ。身近に」

ゴクリと空は唾を飲んだ。携帯電話を手にソラが告げる。

「この電話、いつ切れるか分からないからさ……切れる前に聞いていい？」

「何ですか？」

「彼氏いるの？」

「いないですよ。ソラさん、彼女は？」

「いな——」

プー、という無機質な音が響いた。バッテリー切れ。舞は現実——室内のベッドの上へ引き戻された。地団駄を踏む。

「ああ、肝心なところで！」

川原ではソラがバッテリーの途絶えた携帯電話のディスプレイを見ている。

「フッフ……」

笑った。笑い声が大きくなる。これほど笑ったのは初めてだった。世界が天国に思えた。事実、世界は天国だった。

THIS IS MY LIFE——ソラは実力で自らの運命を切り開いた。

この後、ソラは死ぬ。竹見たちの報復に逢い。果たして、ソラは無駄死だろうか？

私はそうは思わない。君に出来るか？ソラのような生き方が。

地獄から脱し、運命を変える事が。

世の虐められっ子よ、立ち上がれ。君にはそれが出来る。俺にも出来たんだから、君にも出来る。

ソラとは他ならぬ作者である〈私〉の事だから、だ。

9

「あれ、ソラじゃねえ？」

イノキがブレーキを踏み、川原に指を向けた。竹見が運転席に身を乗り出す。

「ソラだ。イノキ、葵を送ってよ」

「タケは？」

「俺はする事があるからさ」

葵が口を挟んだ。

「マー君、止めて」

「何が？」

「嫌だよ、鑑別なんて」

「行かねえよ」

「タケ、俺も行くって！」

「なあ、イノキ。葵を家まで送ってくれって。それじゃあ、バイバイ」

言いながら竹見は下車した。ポケットから刃渡5センチのナイフを抜いた。車内で葵が喚く。

「止めろよ、イノキ！ マブだろう！」

「タケは一人で蹴りを付けるって、言ってたろう！」

「お前、それでいいのかよ！」

「るっせえんだよ！ 黙ってろ！」

*

空は炎を見ている。足音がして振り向いた。竹見の姿が視界に入った。遠くからノソノソ自分の方へ向かってやって来る。

立ち上がった。決着を付ける為に。

やがて竹見が目の前にやって来た。睨み合い——炊き火の炎が激しく燃え盛る。二人の間で散る火花のように。そして——

ブン殴った。渾身の力で。地獄の悪魔——クラスメートの竹見勝をブン殴った。同時に腹部に違和感を覚えた。

空は倒れた。仰向けに。腹部が激しく痛む。

竹見が赤い唾を吐き、ソラの前に屈んだ。

「刺す、つつたろう？」

ソラは自分の腹部を見た。左脇腹に折り畳みナイフが刺さっていた。

「じゃあな、空」

そう言って竹見は炎を足で踏み消した。空は仰向けで泡を噴き、口をパクパクさせていた。

10

竹見はタクシーに乗った——携帯電話の電源を切った。

車窓の風景を眺める。暫く見納めになるシャバの景色を。一日の疲れがドッと押し寄せた。

葵は携帯電話を鳴らしている。何度も何度も。竹見の電話は留守電だ。イノキは車内ミラーに映り込む葵を見た。葵はシクシク泣いている……。

ソラの父はテレビを見ている。母が申し出た。

「捜索願い、出した方がいいんじゃないかしら？」

「ほっときなさい。明日になれば、腹を減らして帰って来る」

「でも……」

「いい機会だ。これで、あいつもちよつとは大人になるだろう」

舞は携帯電話を手にベランダへ出た。流れ星に願いを込める。

「ソラさん……」

舞は夜空を眺めた。いつまでも幸せが続く事を願いつつ。

11

血の海の中、空は大の字で倒れている。

助からないだろう——死を覚悟した。隣を見ると焚き火の炎が微かに燃えていた。小さな炎を空は見詰めた。

悔いはない。未練も、何もない。

嘘かも知れない。けど俺は証明した筈だ。運命など存在しないのだと言う事を。

あるとすれば、それは先入観。この世界では、どんな事も可能だ。

出来る。君ならきっと出来る。幻滅する者たちよ、人生を変えろ。吾輩の辞書に不可能と言う言葉は存在しない。誰の言葉だった？

ナポレオン・ボナパルト——世界史で学んだ俺が最も憧れる人物だ。

12

人間は死ぬ時に走馬灯の如く、人生が目の前を過ると言う。空が見たのは未来だった。
未来——電車の座席、シルバーシートでは舞とソラが寄り添い、幸せそうに寝ている。

我に返った。相変わらず、空は川原で死に掛けている。

「ハハハ……」

何故か笑いが込み上げた。空は力を振り絞り、炎を見ながら歌った。

「天……まで……焦が……せ……」

一陣の風が吹いた。風は小さな炎を吹き消した。

夜。夏の長い夜。誰もいない川原で一人の高校生が人知れず、命を落とした。

第三部

13

全速力で森を駆ける——樹海を。もはや見ている神もない樹海の奥地を。

息を切らせながら(高山昇)は木に凭れ掛かった。

「……足も遅いんだな、高山君は」

どこからともなく声がある。どこからともなく……声にはエコーが掛かり、幾重にも木霊して樹海に響き渡る。

木に凭れながら高山は叫んだ。

「お前は誰だ！ 一体、何がしたいんだ！」

叫びが虚しく、エコーを伴う。再び声が聞こえた。野太い男性の声音だった。

「高山昇。27歳。無職、独身。生活保護を受け、東京のアパートで一人暮らしをしている」

くぐもった奇声を発し、高山は走り出した。再び。声から逃れる為に。

懸命に、懸命に逃げて行く。逃げながら自問する——ここはどこだ、俺は何がしたいんだ？

14

コンビニでタバコを買い、店を出る。付近の壁には「精神病は君だけじゃない」と言うポスターが貼られている。ポスターを見て、高山は呟いた。爪を噛みながら。

「俺だけじゃないよね？ 精神病は」

声音が変わった。独り言で受け答えを交わす。

「世の中には苦しんでる人が大勢いる」

「だよな？ どう思う、このポスター？」

「やめとけ。触らぬ神に祟りなし、だ」

溜息を吐き、テクテク歩く。公園に着くと先程、購入したタバコに火を点けた。遊具を眺めながら独り言を続ける。

「……今日も眠れないんだろうな」

「かもな」

遊具で遊ぶ幼子を見る。かつて俺にもあんな時期があった。病気とは無縁で輝ける未来が広がっていた頃が。もう、あの頃には戻れない。二度と。戻りたくても戻れない。

「現実是非情だ」

「……苦しいよ」

「頑張れ」

「うん」

虚ろな眼差しが遊具を眺め、宙を泳ぐ。

こうして一日が過ぎる。一年が過ぎ、十年が過ぎた。一体、俺なんかが生きてて何になる。

時々、自殺を考える。けど死ぬ度胸もない。度胸もなく、取り柄もなく、目的もない。三拍子そろった、俺。

一体、俺は何がしたいんだ？

自問を続ける。やがて夜が訪れる。恐怖に支配される悪夢の夜が。

夜。高山は部屋で寝付けずにいる。

「……やっぱり眠れないな」

「その内、眠れるさ」

「時間が掛かりそうだね」

「だろうな」

溜息を吐き、時計を見た。時刻は深夜一時を回っている。空虚———感じるのは、いつだって虚しさ、だ。

人生は虚しい。真理だと思う。思う自分が情けない。情けないが、自分一人の力ではどうにもならない。

だからこそ、どうにかしたいと思う。そして振り出しに戻る。

今、高山は森を走っている。懸命に。例の声から逃れる為に。

「そうやって一日が過ぎ、十年が過ぎた。さらにこの先、何十年を過ごす。一体、お前なんかが生きてて何になる？」

高山は転倒した。慌てて、落ちている木の枝を拾う。

「ほお、闘うつもりか？ ガッツもないくせに」

「黙れ！」

「お前には何もない。こりゃあ、生きる資格もないな」

目の前を黒い影が横切った。

「ひっ！」

「全く惨めだよ。君って男は本当に哀れだ。悲劇のヒーローを演じているんだろうが、大根役者も甚だしい。自分の不甲斐なさを病気のせいにしてている。そう言うのを何て言うか知ってるか？」

「な、な——」

「偽善者、って言うんだ」

悲しい。だが事実だ。事実は事実として認めなければならない。

涙が溢れる。遣るせなくて、情けなくて、泣く事しか出来ない。そんな自分が嫌になる。心底、嫌になる。死のうと思う。そして死ぬ事も出来ない。

「俺が殺してやろうか？」

背後を振り向いた。目の前に黒い影がいる。逆さまの状態に木にブラ下がつて。

影は高山の首に縄を巻き付けた。そのまま落下し、クルリと宙で一回転する。着地すると同時に、高山の上半身が一気に持ち上がる。縄が一直線にピンと張る。首吊り——目の前には黒い影が浮かんでいる。高山は足をバタバタさせている。

ホクソ笑み、足を抑え付けながら影は告げた。

「こう言う時は財布を側に頼って、靴を脱いでおくんだよ。全く、エチケットもないんだな、高山君は」
そう言って、黒い影は高山の足を思い切り、引っ張った。

飛び起きた。部屋から台所へ駆け、震える手で慌てて精神安定剤を服用する。大量に。

鏡に映る自分の顔は汗でビッシヨリ濡れている。

「……ただの夢だって……夢なんかにはビビるなよ」

高山はヘラヘラ笑っている。死人のように青醒めた顔色で。

これがこの物語の主人公、高山昇と言う男性である。

15

今日は月曜日。図書館に行く日だ。目当ては本ではない。受付嬢の近藤さんだ。近藤さんを一目見たくて図書館に通う。今日こそは声を掛けようと思う。結局、声を掛けずに本を借りる。

本を手に高山は受付へ向かった。憧れの近藤さんの元へ。三冊の哲学書を近藤さんの前に置いた。

「図書カードはお持ちですか？」

近藤さんが素っ気なく告げる。

「あ、はい」

高山はデニムの右ポケットから〈図書カード〉を差し出した。事務手続きが続く。さあ、声を掛けよう。深呼吸をして

結局、声を掛けずに本を借りた。読みもしない本を。毎度のパターンだ。

机の上に積まれた本を眺めた。今日、借りて来たのは〈ニーチェ〉と言う哲学者の本だ。表紙に触れた瞬間、指先に青白い静電気が走った。慌てて、指を引っ込める。

「……な、何だ？」

恐る恐る、もう一度、本に触れた。〈ツァラトストラ〉と言うタイトルの本に。

インターホンが鳴った。玄関へ向かい、ドアを開けた。突如、ガスマスクの男性に煙を噴き掛けられた。そこで意識が飛び——

嘘じゃない本当の話だ、信じてくれ！

16

覚醒した。高山は全裸で吊るされている。目の前には外国人——ドイツ人のようだ——が揺り椅子に着席し、葉巻を吹かしている。

高山は問うた。

「……あ、あなたは誰ですか？」

外国人が立ち上がった。銀色の金属バットを手に。高山に接近し、その目を覗き込む。

険しい表情で外国人は怒鳴った。

「私の名は、フリードリヒ・ニーチェ！」

二、ニーチェ？ 確か、あの本の作者だ。しかし哲学書の作者が俺に何の用だろう？

金属バットが翻った。バットは腹を打ち、高山はくぐもった悲鳴を上げた。

「うぐう！」

ニーチェが高山の髪を掴んだ。手荒く、ロングヘアを掴み、顔を引き寄せせる。

唾を吐き散らし、ニーチェは再び怒鳴った。

「お前は何故、生きる！ お前は何故、生まれた！」

「それが分からなくて、苦しんでいます。一体、私は——」

金属バットが翻った。容赦なく、ニーチェはバットで高山の腹を殴打する。

「人間は超人になる為に生きる！ お前は超人になる為に生まれた！」

イナズマ。

ブツ飛んだ。電撃の解答が脳天を突き抜ける。

今、思えば、この瞬間に高山は変わったのだ。変わり過ぎるくらい別人に——飛び切りダークなストリート・ヒーローに。

バットを構えながら、ニーチェが続ける。

「苦しみも、人間である事をも克服しようと試みる事。その為にお前は生まれたのだ！」
バットはフルスイングで高山の顔面を打ち抜いた。

17

稲妻が直撃し、縄が切れた。嵐の樹海——横殴りの雨が吹き付ける。暗闇の中、影の目には高山の姿が見える。背中から妖気が立ち昇る高山の姿が。高山は意味不明な事を呟いている。

「人間は超人になる為に生きる……超人になる為に俺は生まれた……」

高山が顔を上げた。白い歯を剥き出しにして。

「何を意味不明な事を言っている！」

「超人……それは自分自身を焼き滅ぼす、赤いイナズマ。そのイナズマの名こそ——」

高山が飛び掛かった。獲物を狙うジャッカルのように。牙を剥き出しにして。

取っ組み合いになった。

高山は影の耳を噛み切った。おぞましい悲鳴と共に黒い血飛沫が高山の顔を染める。

「超人になる為に俺は生きる……超人になる為に俺は生まれた……」

ユックリと高山は黒い影に馬乗りになった。首を絞める。締めながら狂ったように叫んだ。

雷鳴が轟き、稲妻が弾けた。

叫んだ。腹の底から。生まれて初めて、叫んだ。絶叫——が樹海をつんざく。

18

飛び起きた。台所へ駆け込み、震える手で精神安定剤の入った袋を手にする。安定剤は吞まず、ゴミ箱に捨てた。鏡を見た。ブツブツ、意味不明な事を呟きながら。

「俺は……俺は……」

「お前はクズだ。生きるに値しない人間の——」

ブン殴った。自分自身を。鏡が粉々に砕け散った。

拳から滴る血液を吸いながら笑う。笑いが込み上げる。笑った。笑いが止まらない。躁状態のスイッチが入ったのだ。

こうして高山はいつもとは違う朝を迎えた。高山は一目散に家から飛び出た。

第四部

19

降りしきる雨。傘も差さず、ズブ濡れで足早に歩く。堂々、風を切り。

前方から自転車が走って来た。飛び掛かった。そのまま自転車を奪い、ペダルを漕いだ。向かう先は一つ——

——図書館。高山の自転車が急停車した。自転車を乗り捨てて、図書館へ入る。

受付に向かう。本は借りない。本を借りに来たのではない。目当ては一つ——

近藤さんの元へ。高山は近藤さんの前に立つとビショ濡れのデニムのポケットから紙切れを出した。肌身離さず持ち歩いている紙切れ。

「これ、俺の電話番号です」

「は、はあ？」

近藤さんが目を丸くする。

「是非、電話を下さい。どうしても電話をしたいんです」

館内がざわめく。高山は異変を察知した。紙切れを近藤さんの目の前に置き、逃げるように去った。

「電話、待ってます。それじゃあ！」

千円床屋——バリカンが高山の髪を剃り落とす。

紳士服店——高山が安値のスーツを新調する。

フラッシュが光った。スピード写真がスキンヘッドになった、スーツ姿の高山の証明写真を写し出す。

漫画喫茶で仕事を探した。求人サイトで良い案件が見つかった。パチンコ店を相手にした販促チラシの営業職。

エントリーボタンをクリックし、ガッツポーズを決めた——行くぞ！

高山の快進撃が続く。怖いモノなど何もない。イナズマの社会復帰を果たして見せる。絶対に。

20

死んだ筈の黒い影が目を見開いた。樹海の奥地で。上半身を起こし、影は呟いた。

「……やってくれるじゃないか、高山君」

影が立ち上がる。その目は残忍な輝きを帯びていた。

「君がその気なら私は君の夢、社会復帰を食い止めようじゃないか」

影が歩き始めた。ユックリと。

病魔が再び高山の前に立ち阻もうとしていた。

21

日が昇る。朝になる。一日が始まる。

勝負の日——面接の日。曇り空の下、高山は傘を差し、ビルの前に佇んでいる。スーツ姿で。この面接に全てが掛かっている。深呼吸をした。やがてビルに入り、受付を済ませた。

「……志望の動機は？」

面接は既に始まっている。二人の面接官が高山の返答を待っている。

「社会復帰です」

「社会復帰？」

面接官が怪訝な表情を浮かべる。話が見えないと言った風に。高山は流暢に続けた。

「私は統合失調症と言う病気で働けずにいます。イナズマの社会復帰を果たそうと企んでいます」

「働ける状態なのですか？」

「はい、働けます。私には夢があります」

「一体、どんな夢が？」

……高山は車の上に立っている。陽光の下、マイクを手に街頭演説を繰り広げる。

「私には夢があります！ 大きな夢が！ いつか自分の家庭を持ち、仕事に育児に充実した生活を送りたいと思っています！ その夢を私は実現させてみせます！」

拍手喝采が沸き起こった。割れんばかりの拍手と大歓声だった。

*

「———それでは採用の場合のみ連絡をさせていただきますので」

ふと我に返る。面接は終わったようだ。バッチリの印象だろう。ミッション完了だ。

「ええ、連絡をお待ちしております」

ビルの外に出た。空には虹が架かっている。

高山は力強く第一歩を踏み出した。社会復帰——高山の未来はバラ色に輝いていた。

……信じる事。それは強さ、だ。自分を信じる事。その難しさ。

逆境を乗り越え、敵を排除する。その困難が人間を強くする。

高山は強い。感受性も強い。逆境が高山を強くしたのだ。

そして高山には夢がある。大きな夢が。

言うまでもなく、高山の夢は社会復帰であり、その先にある普遍的な生活だ。

果たして、高山は夢を実現できるのか。

この後、事態は急展開を迎え、高山は挫折する。高山は号泣し、嗚咽する。

しかし誰が高山を否定できるだろう。

何かを信じ、突き進む事。その重要さを高山は体現している。

それは現代社会に著しく欠落するモノだ。

どうか高山の生き様を見届けて欲しい。あなたはきっと失われた何か……信じ、全力で社会の激流に立ち向かう自分を思い起こす筈だ。

それは極めて重要な事だ。逆に言えば、人生に必要な事の全てだ、と作者は考える。

さあ、高山昇の生き様をとくと見よ！

22

夕方の川原は赤焼けに染まっている。高山はボトルで安ワインをラッパ呑みしている。

「……採用かな？」

「勿論。採用、さ」

「乾杯」

高山がボトルを掲げた。ホロ酔いでワインを呑む。

異変は突如、起きた。街行く救急車のサイレンが大音量のノイズとなり、襲い掛かったのだ。サイレンのみならず、車の排気音、風音、都会の雑踏。あらゆる音がノイズとなって高山に襲い掛かったのだ。

高山は耳を塞いだ。なおノイズが襲い掛かる。

「止めろ……止めてくれ！」

ノイズが襲う。病魔が襲う。高山は苦しんでいる。耐え難い苦しみだった。

「畜生！」

高山はワインボトルを地面に叩き付けた。ボトルが砕け、ギザギザの刃になる。

迷わなかった。高山は渾身の力で刃を喉に突き刺した。そのままザックリと喉を裂く。

高山は仰向けに倒れた。口をパクパクさせながら。

「ざまあみろ」

どこからともなく声が聴こえた。ノイズの集合体——黒い影が目の前に出現した。

「所詮、お前は負け犬だ。実に負け犬らしい最期だ」

言い残し、影はフェイドアウトした。高山の未来は粉々に砕け散った。

23

近藤未来は彼氏とベッドに横たわっている。裸で。未来は彼氏に寄り添いながら相談した。
「それで、ズブ濡れの男から電話番号が書かれた紙を貰ったの。勤務中にだよ。超キモかった」
彼氏は約束した。
「今度、そいつが職場に現れるようなら俺に言えよ。ブッ飛ばしてやるから」
そう言って二人はキスを交わした。

「今日、面接に来た彼、どうします？」
オフィス——課長が部長に尋ねた。
「どいつ？」
「精神病の」
「論外だろう」
「これ、彼の履歴書です」
部長は履歴書を受け取ると、シュレッダーに挿入した。

24

川原に雨がポツポツ降って来た。高山は大の字で夕焼け空を眺めている。

負けた。病魔に。人生に。

泣いた。目から止め処なく、涙が溢れた。
悲しかった。悔しかった。自分が信じた、バラ色の未来。目の前で粉々に砕け散った。

敗者に待ち受けるモノは一つ——死。

脳内で声が聴こえた。ニーチェの声だった。

「お前は危険を顧みず、人生に挑んだ。その事は少しも恥じる事ではない」
涙が止まらなかった。胸が張り裂けそうだった。俺の未来……バラ色の未来。あと一步のところまで砕けた。あと一步のところ、で。

ニーチェが告げる。その声は力強く、非情だ。

「最後は有終の美を飾れと言うのが、私の教えだ。立て、高山昇！最後まで走れ！生きた痕跡を世界に刻むんだ！」

力を絞り、高山は立ち上がった。首から血を撒き散らしながら。高山は喋った。途切れ途切れの声で。

「未来……俺の……未……来……」

歩き出した——川に向かって。走った——血を撒き散らしながら。全力で走り続けた。一生懸命、ひたむきに、まっすぐ。

「走れ、高山昇！最後まで走り続けろ！」

目の前に川がある。構うものか——高山は走り続けた。

「うおおおおおっ！」

叫びながら高山はジャンプした。そこでカメラが停止する。高山が川に向かって大ジャンプを派手に決めるところで。

フィルムが焦げ、黒い穴が開く。フィルムは消失し、世界から完全に消える。完全に。

*

これで終わりだ。この物語はこれで終わり。

菊池空と高山昇。二人の社会的弱者は人生に立ち向かった。

暴れて、クタバレ——それが彼らの生き様。

彼らがそうあったように君もそうあってくれ。人生を無駄にするな。闘え。闘って、死ね。

理想と現実のせめぎ合い。それでもなお報われない現実。

LIVE AND LET DIE——現実なんて、クソクラエ。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872